

# 文献からみる高さは・・・

## 天平塔、100年の謎を解き明かす

### ～歴史学の視点から～

文化遺産部（歴史史料研究室） 山本 祥隆

#### 【緒言】

往時、東大寺は大仏殿の南東・南西に、2基の七重塔（東塔・西塔）を擁していた。いずれも奈良時代後半の完成と目され、西塔は10世紀前半に雷火により焼失したものの、東塔は度々修理を加えられつつ、ほぼ平安時代を通して存立しつづけた。

だが、治承4年（1180）の平重衡による南都焼討により、他の堂宇とともに東塔も灰燼に帰した。その後、大勧進重源を中心とする東大寺復興事業の中で東塔の再建も企図され、重源の没後に大勧進を継承した栄西・行勇らの尽力にもより、鎌倉時代初期の貞応2年（1223）頃、東塔は再建成ったとされる。この2代目の塔も、南北朝時代の康安2年（1362）に雷火によって焼亡した。その後は再々建の動きもあったようであるが、完成には至らなかった（以上、表1参照）。

このように、東大寺東塔には創建・再建の2代が存した。今回は、初代の塔を「天平塔」、2代目の塔を「鎌倉塔」と呼ぶこととする。

平成30年（2018）、奈文研は東大寺より「東大寺東塔復元案作成にかかる調査研究業務」を受託することとした。この受託研究の遂行に際し、以前に東塔跡の発掘調査に携わっていた縁もあり、文献史料に関する調査・研究は報告者が担当することとなった。なお、東塔跡の発掘調査の成果については、平成30年6月16日開催の第122回公開講演会にて、トピック講演「重層する基壇 一東大寺東塔院跡の発掘調査一」としてご紹介したところである。

詳細は後述するが、これまで、天平塔の高さ（全高）については①31丈3尺8寸（約92.6m）案、②33丈8尺7寸（約99.9m）案、③23丈8寸（約68.1m）案、の3案が鼎立し、いずれとも決しがたい状態であった（1尺=295mmで換算）。天平塔の高さは、「大仏殿碑文」と通称される板文史料に記される。この大仏殿碑文はすでに失われているが、多くの文献が引用し、内容が今に伝わる。だが、引用する文献ごとに、天平塔の高さの数値が異なっている（表2）。これが、天平塔の高さに関して、100年以上におよぶ渾沌を引き起こしていたのである。

天平塔の復元を志そうとすれば、その高さが約100mであったか、それとも70mほどであったのかは、何としても、また真っ先に解決せねばならない重要な課題となるであろう。報告者はそのように考え、《100年の謎》天平塔の高さの解明に挑むこととした。果たして、天平塔の高さの真実は・・・

## 【目次】

1. はじめに
2. 天平塔の高さをめぐる先行研究
3. 大仏殿碑文
4. 根本史料
5. 塔の「高」の概念について
6. 根本史料の写本調査
7. 伴信友の校訂の根拠
8. まとめ

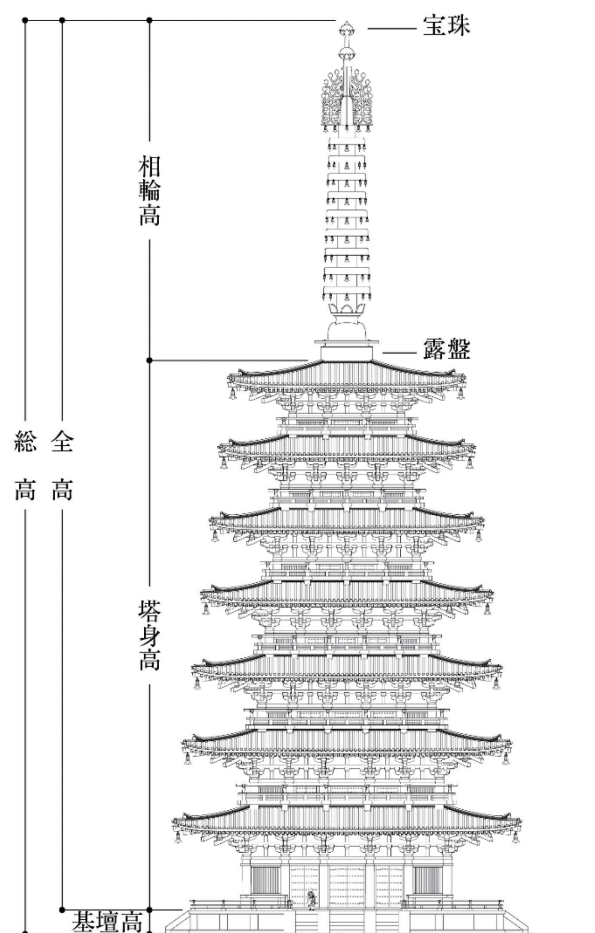


図1 塔婆の高さに関する用語（『復元研究』より）

## 【主要参考文献】

奈文研 2024『奈良文化財研究所学報第104冊 東大寺東塔の復元研究』（以下、『復元研究』）

天沼俊一 1910「創立当時に於ける東大寺南大門、東西両塔院及び其沿革。附講堂、僧坊、食堂」

『建築雑誌』283号

天沼俊一 1918「東大寺東塔院及西塔院址」『奈良県史跡勝地調査会報告書』第5回、奈良県

足立康 1931「南都七大寺塔婆の高さ」『考古学雑誌』21-7（足立 1987『塔婆建築の研究』中央公論美術出版 所収）

足立康 1933「東大寺七重塔の高さに就いて」『考古学雑誌』23-11（同上）

箱崎和久 2004「東大寺七重塔考」『ザ・グレートブッダシンポジウム論集 第2号 論集東大寺創建前後』

東大寺 2018『東大寺東塔院跡 一境内史跡整備事業に係る発掘調査概報1ー』（以下、『東塔院概報』）

太田博太郎 1979『南都七大寺の歴史と年表』岩波書店



年	事 項	出 典
天平寶字 8 年 (764)	東塔の露盤（相輪）を上げる。	『東大寺要録』
寛弘 6 年 (1009)	東塔、修理。	『東大寺要録』
天喜 5 年 (1057)	東塔、落雷。心柱が裂ける。	『東大寺別当次第』
康平 4 年 (1061)	東塔、七重の隅木の取り替え。	『東大寺別当次第』
寛治 7 年 (1093)	東塔、蓋層隅木の取り替え。	『東大寺別当次第』
康和 3 年 (1101)	東塔、修理。	『東大寺要録』『東大寺別当次第』
治承 4 年 (1180)	東塔、平重衡南都焼き討ちにより焼失する。	『玉葉』『東大寺続要録』他
建仁元年 (1201)	東塔、重源が造営を望む。	『春華秋月抄』
元久元年 (1204)	東塔、事始。再建に着手。	『百鍊抄』
建永元年 (1206)	重源入滅。栄西が大勧進となる。	『明月記』他
承元 2 年 (1208)	東塔、立柱。翌年第 2 層へ。	『東大寺略縁起拔書』
建保 3 年 (1215)	栄西入滅。行勇が大勧進となる。	『沙石集』他
建保 4 年 (1216)	東塔、行勇により造営が再開される。	『東大寺略縁起拔書』
建保 6 年 (1218)	院宣を下し、七重塔の材木勧進の訴えを裁す。同年、東塔心柱を引く。	『東大寺略縁起拔書』
貞応 2 年 (1223)	東塔、相輪を上げる。	『百鍊抄』
嘉祿 3 年 (1227)	「東塔廊」銘軒瓦を製作する。	軒平瓦銘
嘉禎 4 年 (1238)	東塔供養会開催か。	『東大寺文書』
弘安頃 (1285 前後)	東塔、修理。	『東大寺文書』
正和元年 (1312)	東塔、雷火により火事。	『東大寺文書』
文保 2 年 (1318)	東塔、修理。	『東大寺文書』
元亨元年 (1321)	東塔、修理。	『東大寺文書』
康安 2 年 (1362)	東塔、雷火により焼失する。	『嘉元記』
明德 2 年 (1391)	足利義満、東大寺に塔婆料所として遠江国蒲御厨を寄進。	『東大寺文書』
応永 5 年 (1398)	東塔、事始。	『続史愚抄』『後鑑』
明治 4 年 (1871)	社寺領上知令。東塔院跡、東大寺の手を離れる。	明治 4 年正月 5 日太政官布告他
明治 15 年 (1882)	大仏殿の営繕に、東塔の再建を並べて請願。	「東大寺大佛殿営繕并東塔建築ニ付勸奨ノ儀伺」
明治 26 年 (1893)	西南の役および千島艦事件殉難者の供養のため石碑建立。基壇構築時に東塔院跡の礎石を搬出した可能性あり。	碑文、明山大華 1935
明治 42 年 (1909)	天沼俊一による測量調査および模型制作。	天沼俊一 1910、同 1918
大正元年 (1912)	東塔院跡、国有地となる。	奈良県土地台帳
大正 5 年 (1916)	東塔院跡、保存工事を行う。	奈良公園史編集委員会 1982
昭和 7 年 (1932)	7 月 23 日、「東大寺旧境内」史蹟指定。	官報 7 月 23 日文部省告示第 191 号
昭和 14 年 (1939)	5 月 8 日、「公園解除御願」内務大臣宛に提出。土地返還の動き本格化。	奈良公園史編集委員会 1982
昭和 27 年 (1952)	国有地の一部（東塔跡他）、東大寺に払下げ。	奈良県土地台帳

表 1 東塔院略年表（『東塔院概報』より）





図2 2016年度・奈文研平城第574次調査 天平塔基壇北面検出状況（北東から）

	東 塔	西 塔	露 盤
【史料1】『東大寺要録』	23丈8寸	23丈6尺7寸	8丈8尺2寸
【史料2】『朝野群載』	33丈8尺7寸	33丈6尺7寸	8丈8尺2寸
【史料3】『扶桑略記抄』	33丈8寸	33丈6尺7寸	8丈8尺2寸
【史料4】『七大寺日記』	22丈8寸	23丈6尺7寸	8丈8尺2寸

表2 4史料における「高」の数値（『復元研究』より）



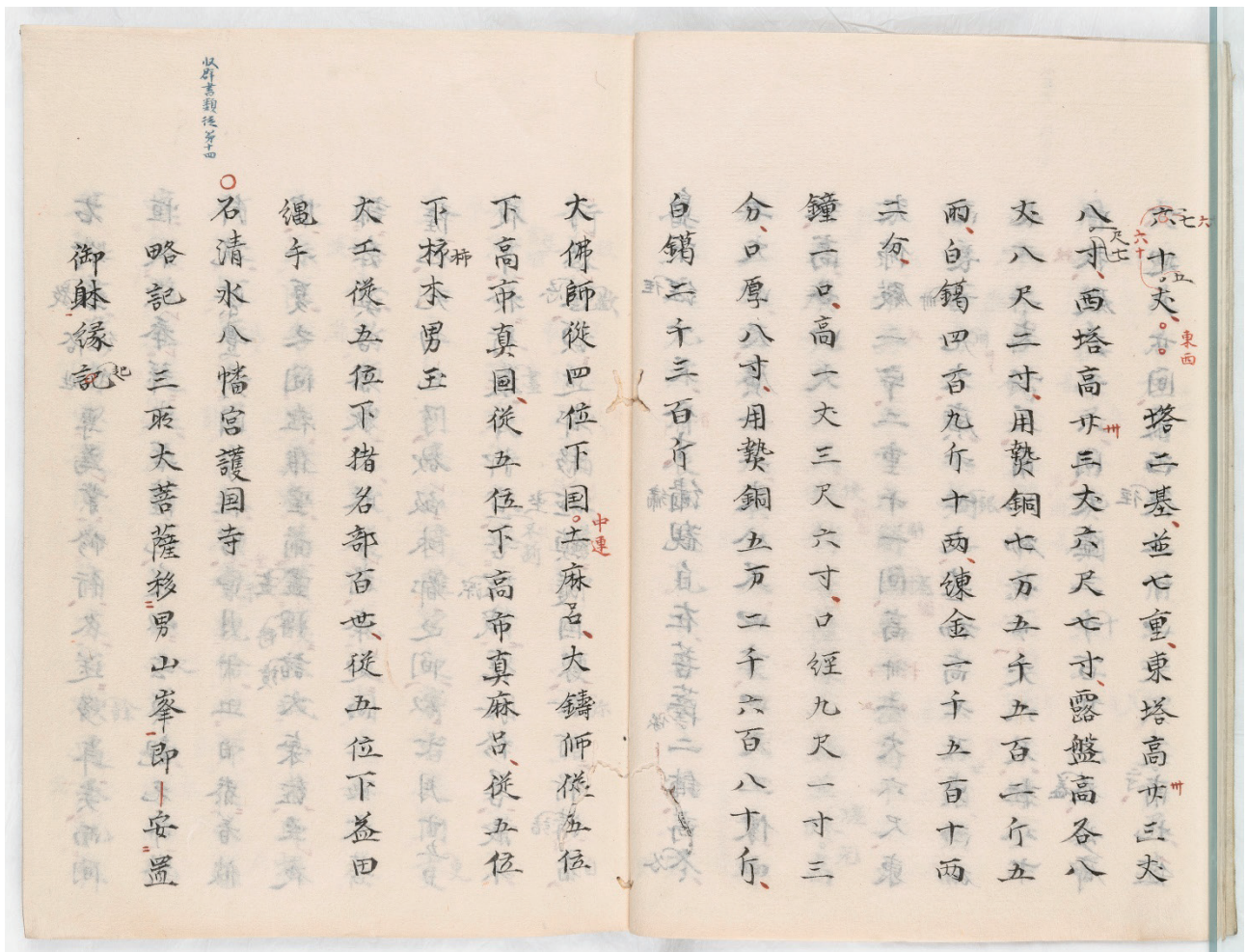


図3 伴信友校訂本『朝野群載』（東京国立博物館蔵）

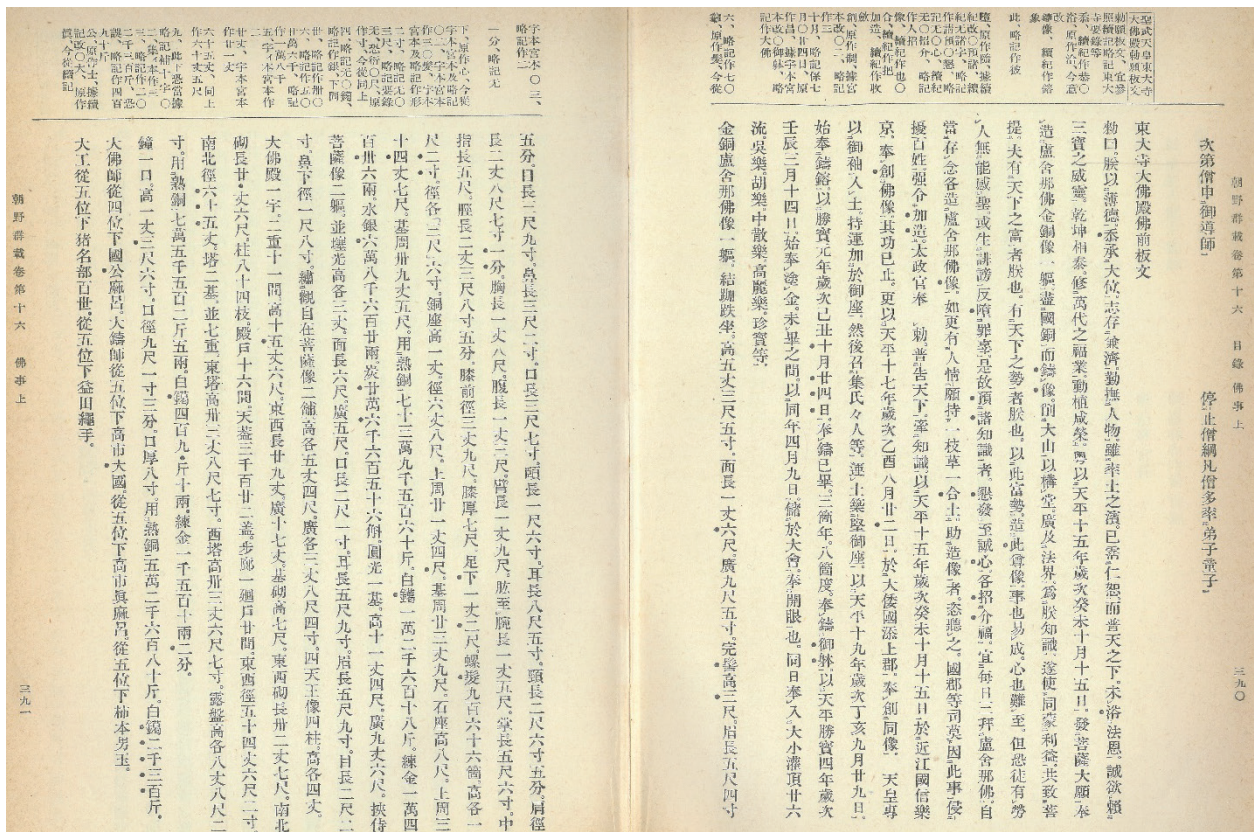


図4 新訂増補国史大系本『朝野群載』（吉川弘文館）







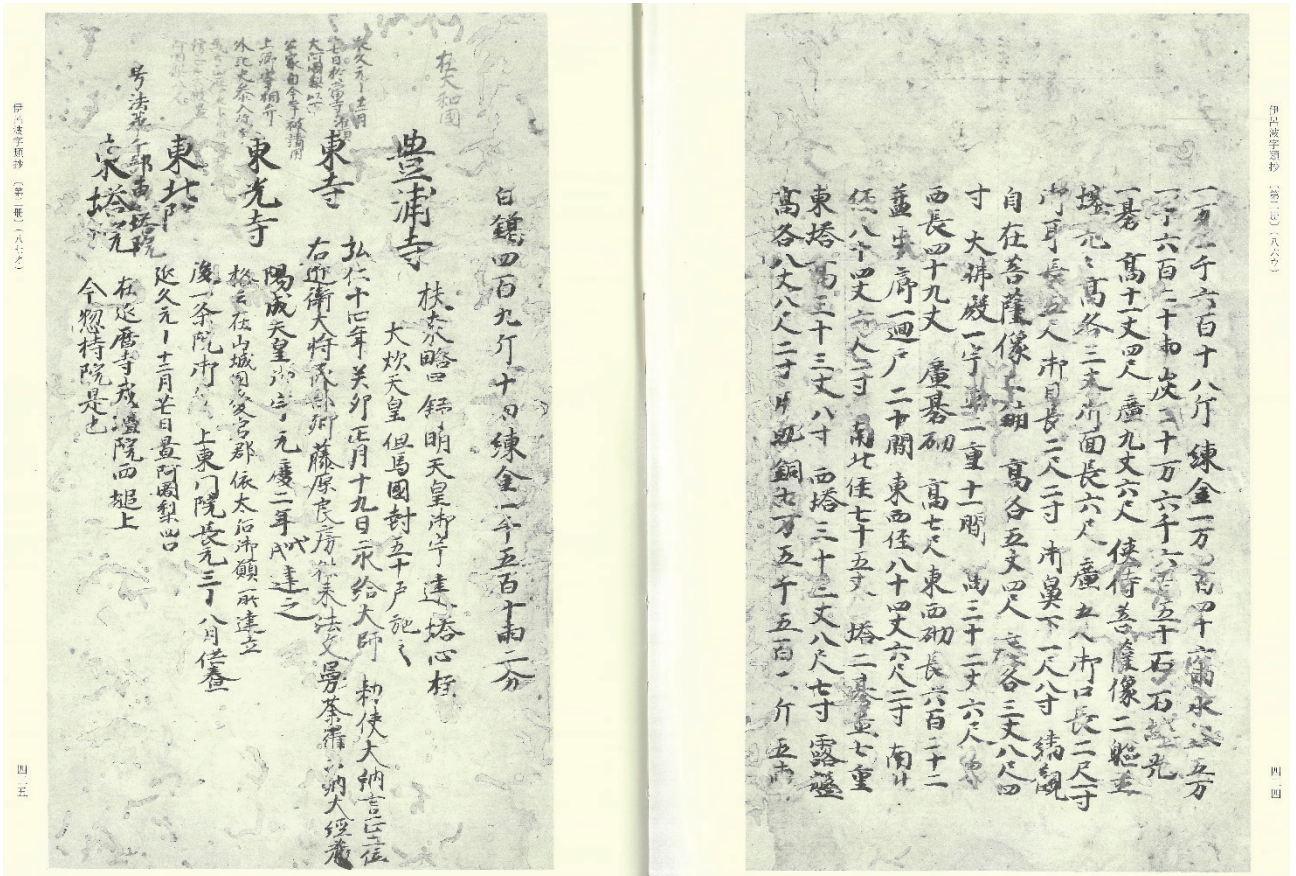


図6 学習院大学蔵本『伊呂波字類抄』

(土井洋一解題索引・古典研究會出版1986『伊呂波字類抄』故辭書音義集成 第14巻、汲古書院より)

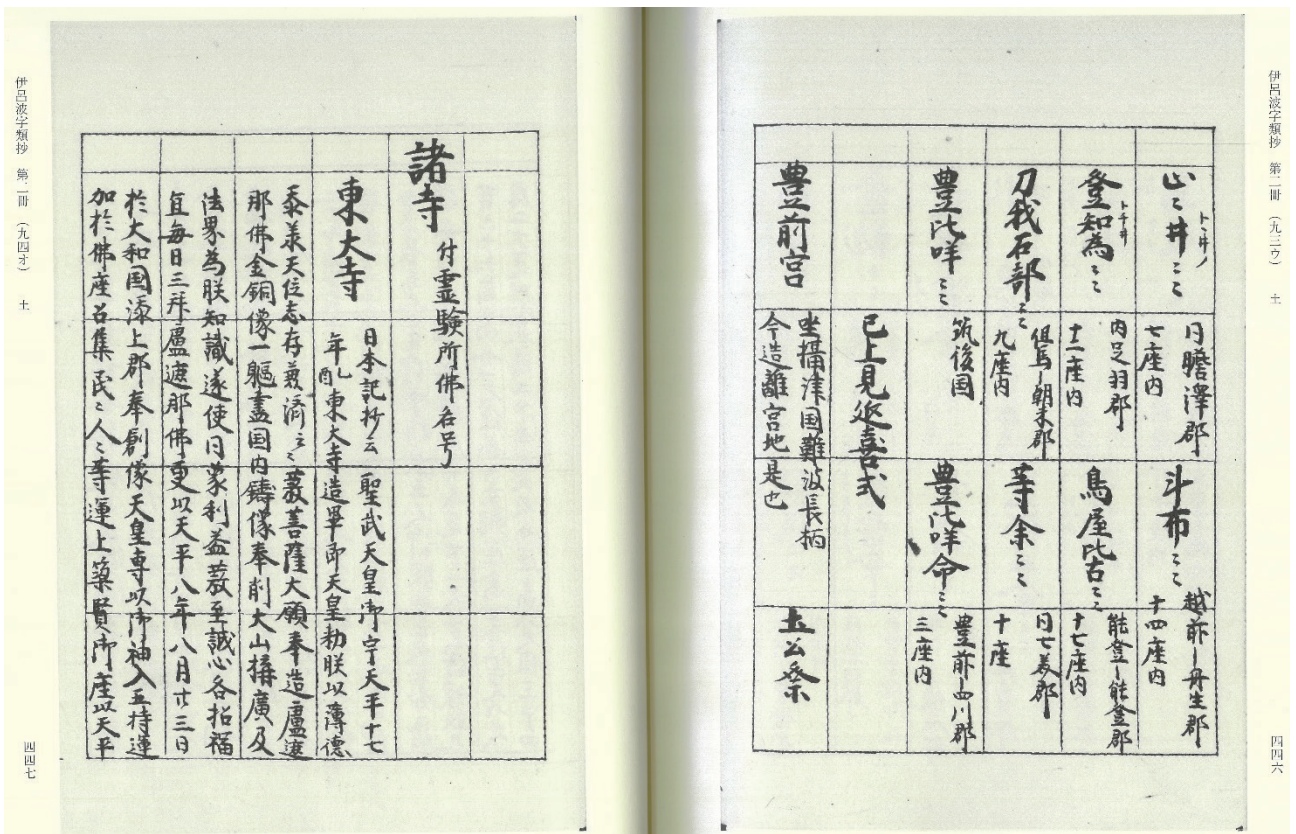


図7 大東急記念文庫本『伊呂波字類抄』

(築島裕責任編集・月本雅幸編集協力2012『伊呂波字類抄 第一巻』汲古書院より)



項 目	東大寺要録	朝野群載 (①三条西本)	朝野群載 (⑥伴信友校訂本)	伊呂波字類抄 (⑩学習院本)
於大和国添上郡奉創同像	天平17年 (745)	天平17年 (745)	天平17年 (745)	天平8年 (736)
始奉鑄銘	天平19年 (747)	天平19年 (747)	天平19年 (747) [←天下19年]	天平9年 (737)
奉鑄已了	勝宝元年 (749)	勝宝元年 (749)	勝宝元年 (749)	天平10年 (738)
始奉塗金	天平勝宝4年 (752)	天平勝宝4年 (752)	天平勝宝4年 (752) [←天下勝宝4年]	天平11年 (739)
儲於大會奉開眼也	同年	同年	同年 [←同畢]	同年

表3 『東大寺要録』『朝野群載』『伊呂波字類抄』対照表(1) 大仏殿碑文B部分 年紀 (『復元研究』より)

項 目		東大寺要録	朝野群載 (①三条西本)	朝野群載 (⑥伴信友校訂本)	伊呂波字類抄 (⑩学習院本)
大仏殿	高	12丈6尺	12丈6尺	32丈6尺 → 15丈6尺	32丈6尺
	東西長	29丈	29丈	29丈 → 49丈	49丈
	廣	17丈	17丈	17丈	(脱)
	基砌高	7尺	7尺	7尺	7尺
	東西砌長	32丈7尺	32丈7尺	32丈7尺	(脱)
	南北砌長	20丈6尺	20丈 (又)	20丈 → 21丈	(脱)
	柱	84枝	84枚	84枚 → 84枝	(脱)
	殿戸	16間	16間	16間	(脱)
	天臺	3122盖	3122盖	3122益 → 3122盖	(一部脱カ) 622盖
歩廊一廻	戸	20間	20間	20間	20間
	東西徑 (徑)	54丈6尺	54丈6尺	54丈6尺 → 54丈6尺2寸	84丈6尺2寸
	南北徑 (徑)	65丈	60丈5尺	60丈 → 75丈 → 65丈 → 60丈	84丈6尺2寸 ※衍カ 75丈
塔二基	東塔高	23丈8寸	23丈8寸	23丈8寸 → 33丈8尺7寸	33丈8寸
	西塔高	23丈6尺7寸	23丈6尺7寸	23丈6尺7寸 → 33丈6尺7寸	33丈8尺7寸
	露盤高	8丈8尺2寸	8丈8尺2寸	8丈8尺2寸	8丈8尺2寸

表4 『東大寺要録』『朝野群載』『伊呂波字類抄』対照表(2) 大仏殿碑文C部分 建築寸法 (『復元研究』より)